＜原著論文＞

保護者との密接な連携を図った学校経営の在り方
－中学校就学時における生徒と保護者の不安との関係から－

跡見学園女子大学　山口豊一
鉾田市教育委員会　大川久

概要

本研究では、中学校就学時における生徒と保護者の不安との関係から「地域・保護者との密接な連携を図った学校経営の在り方」を明らかにしようとした。その際、中学校就学時の「保護者自身の不安」「保護者の対子ども不安」「子ども自身の不安」の３つの尺度を作成し、調査を行った。

その結果、保護者は、思春期の子育てに不安を抱いていることが明らかになった。また、保護者の対子ども不安は、子どもの学習面、進路面、人間関係に関するものが多いことが示された。子ども自身は、部活動や中学校の生活などに対する不安が多いことが明らかになった。

キーワード：中学校就学時、保護者自身の不安、保護者の対子ども不安、子ども自身の不安、学校経営

1　問題と目的

Ａ市は，昭和３０年代後半開発が始まり，それまでの商業，農業，漁業を中心とした市から，臨海工業地域の拠点として，石油コンビナートなどをはじめとする工業により経済発展を遂げる市に変貌してきた。そして，それに伴う急激な人口増加，都市化の波は，地域の在り方や住民の物事の考え方に影響を与えてきている。また，高度経済成長の波がおさまった現在でも，学区によっては人口増加が続き，開発による都市化や工業化の波は，この地域に経済的な豊かさをもたらしている。

一方で，都市化や工業化の波は，地域の中での核家族化，人間関係の希薄化，犯罪の多発化に密接なつながりがあると考えられる(文部科学省,2002；以下文科省)。発展の続く市にあって，不審者の出現は，子ども達の安全で安心な登下校，地域社会や学校での生活を脅かすものとなり，その対応の点で地域の在り方や保護者，住民に様々な不安や課題を投げかけている。

このような社会状況の中，どの学校も地域社会から信頼され，安全で安心できる学校づくりを創意工夫し，模索し続ける必要がある。「開かれた学校づくり」ということばが使われるようになって久しい。これからの小・中学校教育では，地域・保護者との密接な連携を基にして学校経営が行われることが一層重要になることはいうまでもない（文科省,1998)。信頼される自律的な学校運営（小島、2002）に向けて，学校評議員制度は多くの学校で導入され，実施されるようになった。また，コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）が創設された平成１６年度以降は，指定される学校は全国的に年々

増加している現状にある。学校・家庭・地域が一体となってより良い教育活動を展開しようとする考え方は，さらに広まりを見せている。このような中にあって，学校と地域・保護者が率直に意見を述べ合える双方向の関係を構築させ，学校経営の実践を展開することが，信頼される学校づくりを進めていく上で，より大切な時代になってきているといえる。

管理職である校長が，学校経営方針などの情報を学区の地域・保護者に積極的に発信することは重要である。管理職が学校経営を「どのように考え」，「どのように実践し」，「学校をどのような方向に導いていこうとしているのか」を知らせることは，地域・保護者が学校を理解し，信頼し，協力をしていくための大切な前提条件であるといえる。また，生徒や地域・保護者が学校に対して「どのように考え」，「何を求めているのか」に管理職が耳を傾けることは，生徒を理解し，地域・保護者を理解するためだけではなく，学校の見えない部分に複眼的に目を行き届かせたり，課題となっている部分を率直に受け止めたり，学校改善に向けて努力を払う機会としたりするためにも欠かすことのできない視点である。

保護者が学校に伝えたい悩みや不安は，保護者自身の悩みや不安であると言えるが，そればかりでなく，学校の課題であり，改善につなげなければならない点と密接に関連していると考える視点をもつことが大切である。また，生徒が学級担任などに相談したい悩みや不安も，保護者同様，生徒自身の悩みや不安であるばかりでなく，それは，学校の課題改善につながる大切な視点でもあると考え，保護者や生徒の目線から学校を見つめ直してみることも重要である。

そこで、本研究では中学校就学時における生徒と保護者の不安を明らかにすることを目的とする。そのことで、地域・保護者との密接な連携を図った学校経営に活かす一考察になればと考える。

2　研究の基本的捉え方

（1）「不安」の定義

不安とは，「現実の恐怖や危険ではなく，起こるかもしれない恐怖や危険に対する取り留めのない情報」と捉えた(国分、1990)。また，田代（1999）は，この不安を「正常不安」と「病的不安」の二つに分けている。そして，「正常不安」を「不安は難問を解決する原動力として働き，不足の情報を収集して，いろいろ思慮させ，創造性を発揮させて，新しい解決方法を試み，失敗を重ねて成功へ導くか，前もって積極的に予防措置を講じることによって，難問を解決へと導き理想の状況や自己に近づく。この原動力となるもの」と述べている。本研究では，できるだけ，この「正常不安」の考え方に立ち，中学校入学時の生徒と保護者が感じる不安に限定することで，考察を進めることにした。

（2）中学校就学時における生徒と保護者の不安の特徴

中学校就学時の子どもをもつ保護者にとって，思春期の子どもへのかかわり方，基本的生活習慣や規範意識の習得，いじめ，不登校，そして進路についてなど，子育てにかかわる不安や悩みは大きな割合を占めているといえる。子育てが良い方向に向かうためには，

時間をかけた話し合いと根気強いかかわり，そしてお互いの成長が必要なだけに切実な問題である。また，これらの問題は，保護者によっては，日常的に存在する不安と密接に結び付きやすいものともいえる。

現在の小・中学生の保護者世代は，日本の高度経済成長期に子ども時代を過ごした世代にすっぽりとあてはまる世代でもある。都市化の進行とともに，地域住民の隣近所のつながりや地域で連携した行事や定期的な活動に対する関心が低くなり，それに伴い，地域で子どもたちが集団を形成する場も少なくなってきている。このように，地域社会の教育力が低下し，家庭の生活様式や考え方に大きな変化が生じている中で，経済的な豊かさだけを一身に受けて成長してきた世代，それが今の保護者世代とも言える。

戦前の旧家には，奥の間に「忠孝」などの「家訓」と呼ばれるようなことばが額に入り飾られていた。しかし，戦後，そして高度経済成長期を過ぎると，そのような日本の家庭の良さは徐々に消え失せていくようになる。家の伝統や子育て観なども変容をはじめ，個が尊重され，自由な考え方がいろいろな面で広まりを見せるような時代になってきた。子育てに関しても，いろいろな考え方が提唱され，保護者自身が自分なりの子育て観やしつけ方をしっかりともてない状況も見受けられることが多くなっている。このような世代の保護者は，子育てや教育の問題についての不安や悩みをどのように受け止め，どのように克服しようとしているのかを具体的に捉えたいと考えた。

また，子ども達に目を向ければ，「中一ギャップ」ということばを最近よく耳にするようになった。以前から不登校が増加する時期の一つとして，小学校から中学校へと進学する時が挙げられてきた。中学校就学時の生徒達は，教科担任制，学習内容の増加と進度，部活動，そして友人関係など，様々な環境の変化と直面させられている。彼らのほとんどは，小学校までの様々な体験を基に，環境の変化に順応し，問題を克服しながら，中学校生活を謳歌しようと努力している。しかし一方で，希望に溢れた中学校生活に順応しにくく，不安やストレスを抱える生徒がいることも事実である。人間関係づくりなど，友だちとの交流体験を通して身に付けなければならないことも，体験の未熟さなど何らかの要因があると考えられる。

このように，中学校就学時における生徒と保護者は，多くの不安を抱える要因があるといえる。具体的には，そのような中学校就学時の生徒や保護者の不安を学校経営の視点で，どのように捉え，どのような対応策を見出し，そして，どのように日々の実践に結び付けていこうとしているかが求められている。幅広い生徒理解や保護者理解を進め，地域・保護者と密接な連携を図った学校経営が，現在欠かすことのできない視点であると考える。

3　方法

本研究では，中学校就学時の生徒と保護者が感じる不安を「保護者自身の不安」「保護者の対子ども不安」「子ども自身の不安」の３種類の調査項目を作成し，その調査項目に限定して考察・分析を試みることとした。なお，この調査は，以下のように実施した。

（１）「保護者自身の不安」に関する調査について

「保護者自身の不安」に関する調査項目を１３項目作成した。項目の内容としては，保

護者との人間関係に関する項目が５項目，中学校への関心に関する項目が３項目，ＰＴＡ活動への参加に関する項目が２項目，しつけに関する項目が３項目である。

保護者自身の人間関係，学校に関する関心，ＰＴＡ活動への参加意識，子どものしつけなどに関する不安について捉えようとした。

（２）「保護者の対子ども不安」に関する調査について

「保護者の対子ども不安」に関する調査については，山口・高柳（2006）を参考に２６項目作成した。項目の内容としては，学習に関する項目，友人関係に関する項目，日常生活に関する項目，いじめに関する項目，進路に関する項目，部活動に関する項目である。「保護者自身の不安」に関する調査と，少し違った観点である。子育てを行っていると，基本的生活習慣，規範意識，思春期の子どもへのかかわり方など，保護者自身の狭い考え方だけでは解決できないことが多くなる。子どもと関わりながら保護者がどのような不安を感じているかを捉えようとした。

（３）「子ども自身の不安」に関する調査について

「子ども自身の不安」に関する調査については，山口・高柳（2006）を参考に２３項目作成した。項目の内容としては，友人関係に関する項目，進路に関する項目，部活動に関する項目，学習に関する項目，いじめに関する項目，日常生活に関する項目である。小学校を卒業し，中学校へ進学することになった子どもたちは，新たな生活に向かって夢を抱き，胸を膨らませていると考えられる。しかし，教科担任制，部活動，新しい友だちとの出会い，進路に関する悩みなど，今まで経験したことのない中学校生活への未知の不安をもつことは自然なことである。

中学校就学時の生徒自身の不安はどのようなものであるかを捉えたいと考えたのと同時に，「保護者の対子ども不安」と同じ内容項目を設けることで，それぞれの不安について捉えることができるように努めた。

（４）調査時期・対象

ア　調査実施期日：平成２０年５月～平成２０年６月

イ　調 査 対 象：

①　子ども自身の不安

平成２０年度Ａ市公立８中学校に就学した生徒　２８８人

②　保護者自身の不安

平成２０年度Ａ市公立８中学校に就学した生徒の保護者　２６２人

③　保護者の対子ども不安

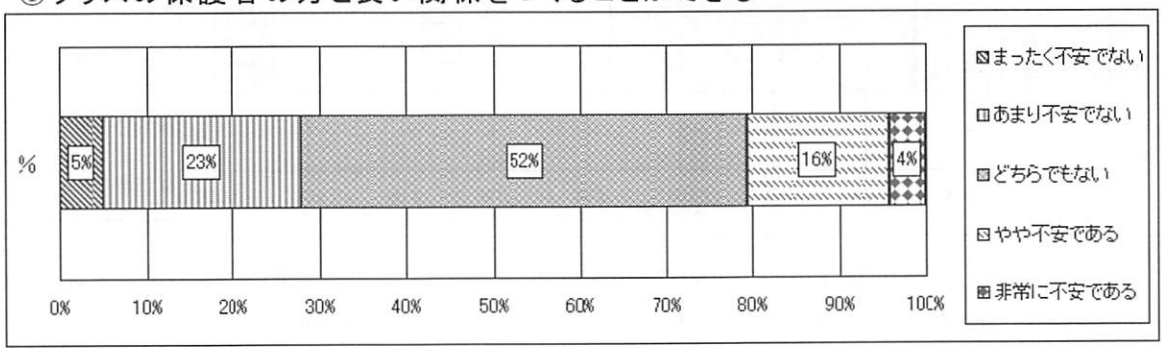
平成２０年度Ａ市公立８中学校に就学した生徒の保護者　２６４人

4　結果と考察

（１）「保護者自身の不安」

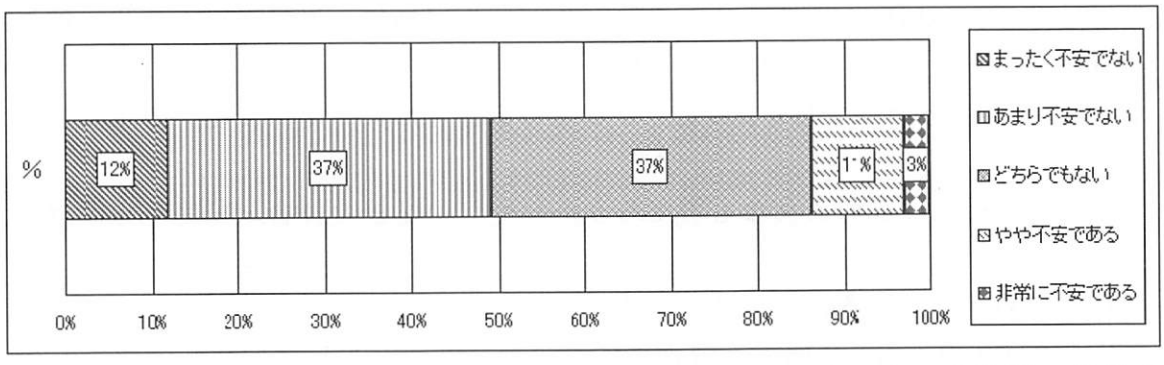
1)主な項目の特徴

①クラスの保護者の方と良い関係をつくることができる



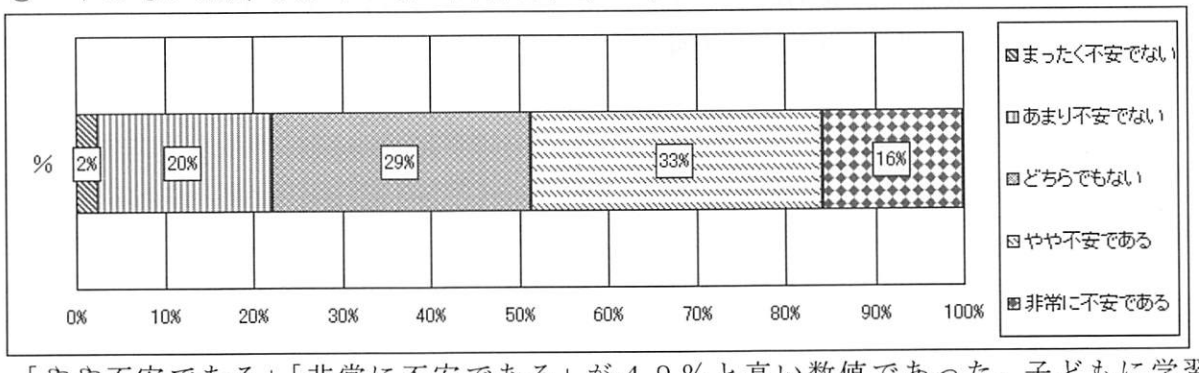
「まったく不安でない」「あまり不安でない」は２８％と低い数値であった。また，「どちらでもない」という項目の割合が５２％と半数を超えていた。クラスの保護者間の人間関係がより良い関係になるためには，その阻害要因を分析する必要がある。

④ 分からないことなどを相談できる人がいるか。



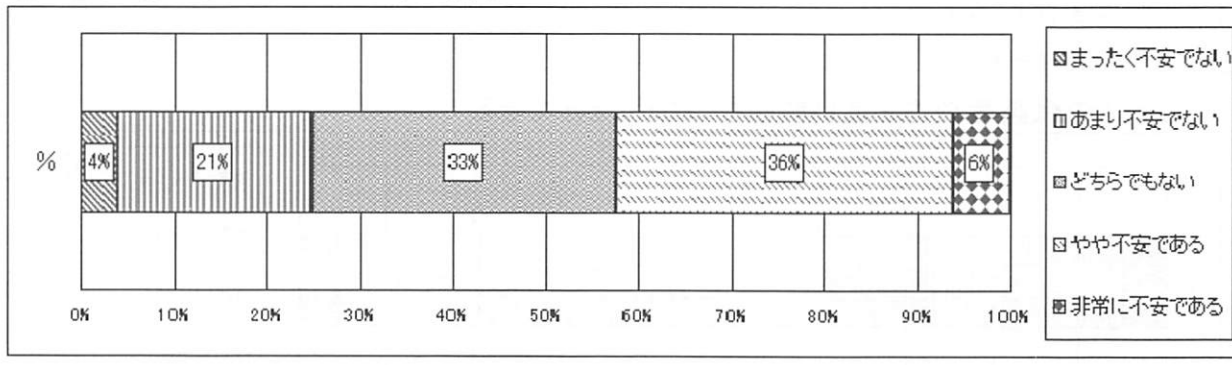
「まったく不安でない」「あまり不安でない」は４９％であった。半数弱の保護者が分からないことを相談できる人がいることに対する不安が少ないと回答していた。「どちらでもない」という項目が３７％であり，保護者間の人間関係の不安は少ないと解釈できる。

⑨　子どもが理解できていない内容を，家で教えてあげる事ができるか。



「やや不安である」「非常に不安である」が４９％と高い数値であった。子どもに学習内容を教えることを不安に感じている保護者が多くいることが分かった。

⑪ 思春期の子どもにどのように関わっていけばよいか



思春期の子どもへの関わりについて「まったく不安でない」「あまり不安でない」は２５％という数値なのに比べ，「やや不安である」「非常に不安である」の４２％と高い数値であった。保護者は，思春期の子どもに対してどのように関わったらよいのか不安であることが分かった。

２）「保護者自身の不安」のまとめ

ア 「分からないことなどを相談できる人がいるか」では，「まったく不安でない」「あまり不安でない」は 12%、37%とある程度の数値を示している。しかし，「クラスの保護者の方と良い関係をつくることができるか」や「地区の保護者の方と良い関係をつくることができるか」の人間関係では，「まったく不安でない」「あまり不安でない」が 57%の数値となっており，およそ５０％の保護者は人間関係に関する不安が少なかった。

イ 「中学校の授業はどのようなものだろうか」や「中学校の校舎・校庭・施設はどうなっているのか」の項目では，「まったく不安でない」「あまり不安でない」が３０％，３６％であり，保護者の不安は低い数値であった。

ウ 「保護者自身の不安」に関する調査全体を通していえることであるが，「どちらでもない」という回答についての数値が高くなる質問項目が多かった。一番高い数値は５０％に達したものもある。

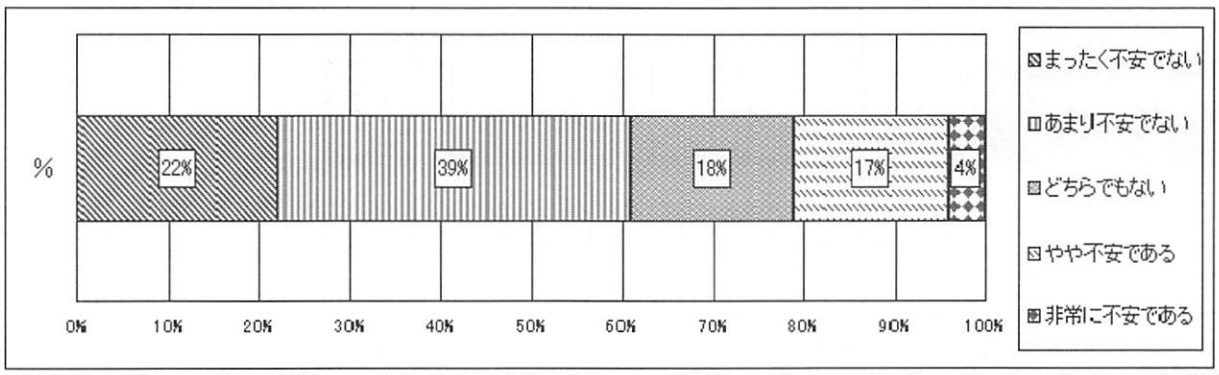
エ ウと関連して，「まったく不安でない」「あまり不安でない」と「やや不安である」「非常に不安である」が同じように低い数値で両極化する項目が見られた。

オ 学習に関する項目や思春期の子どもへのかかわり方では，「やや不安である」「非常に不安である」の割合が高くなる傾向にあった。

（２）「保護者の対子ども不安」

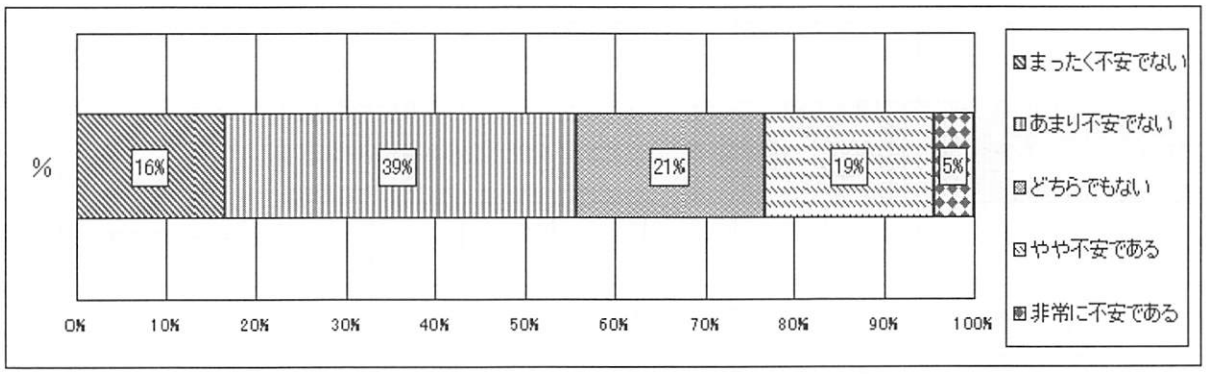
１） 主な項目の特徴

② 自分勝手な行動をしないか



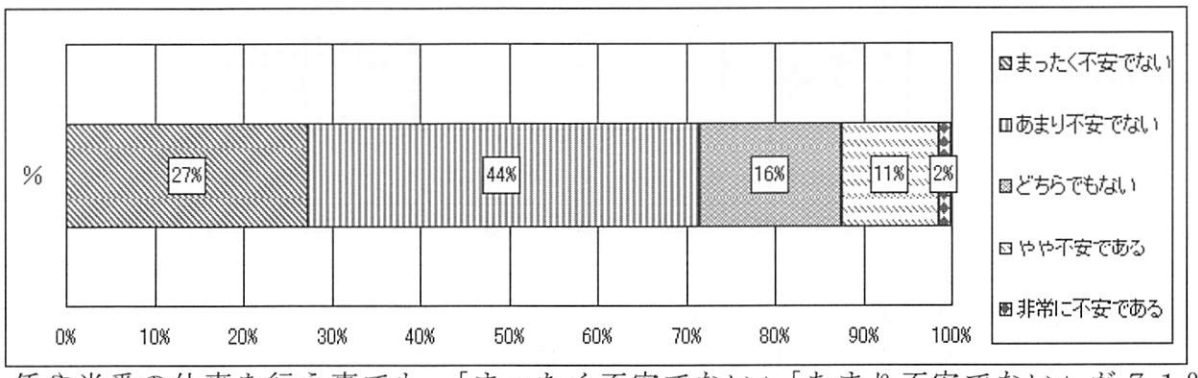
「まったく不安でない」「あまり不安でない」が６１％という高い数値であり，保護者は学校で子どもがしっかりと行動できると捉えていることが窺えた。

③ 自分の感情を抑える事ができるか



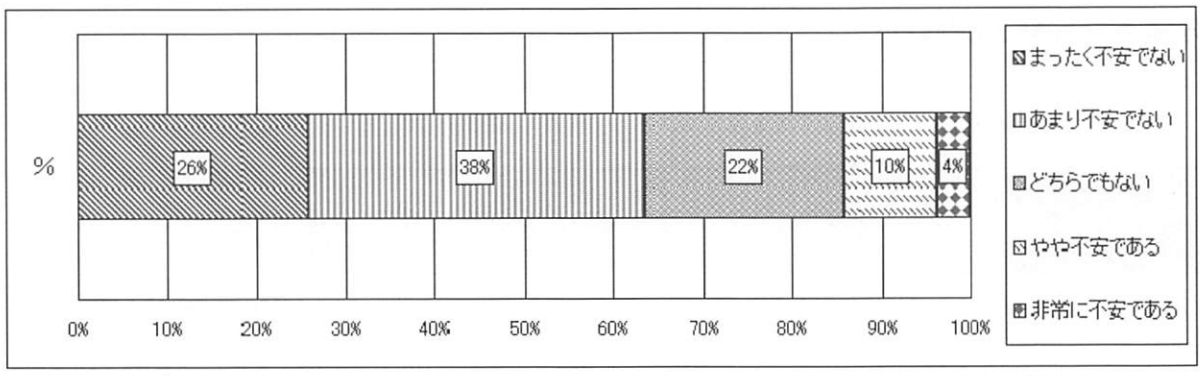
「まったく不安でない」「あまり不安でない」が５５％に達していた。「やや不安である」「非常に不安である」が２４％であるのに対し，２倍強の高い数値となっていた。過半数の保護者は，子どもが「感情を抑える事ができる」と判断していることが分かった。

④ 係や当番の仕事をきちんと行う事ができるか



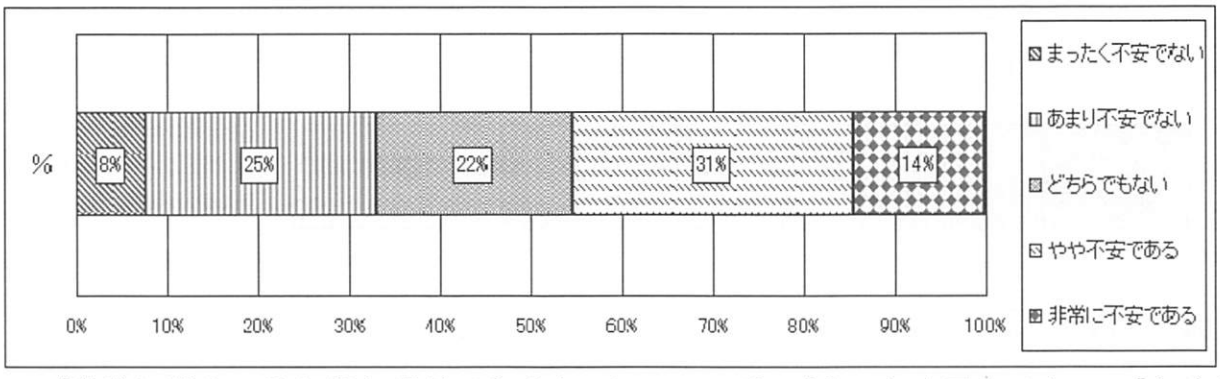
係や当番の仕事を行う事でも，「まったく不安でない」「あまり不安でない」が７１％の非常に高い数値となっていた。また，一方で「やや不安である」「非常に不安である」は１３％と低い数値となっていた。

⑥友だちをいじめてしまうことはないか



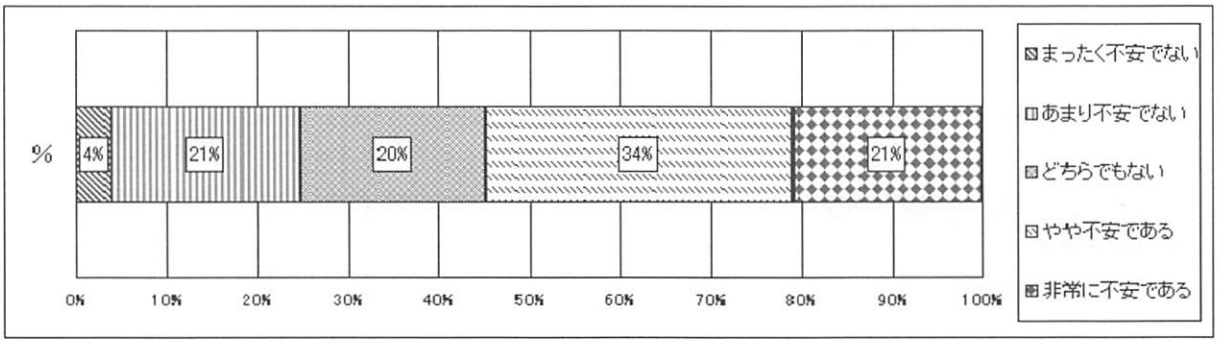
「まったく不安でない」「あまり不安でない」が６４％と高い数値となっていた。７割近い保護者は友だちをいじめるようなことはないと考えていた。

⑦勉強に進んで取り組む事ができるか



「勉強に進んで取り組む事ができるか」については，「まったく不安でない」「あまり不安でない」が３３％であるのに対し，「やや不安である」「非常に不安である」は４５％と半数に迫る数値となっている。学習に対する期待が窺えた。

⑪　中学校で学習を遅れることなく続けていくことができるか



「中学校で学習を遅れることなく続けていくことができるか」でも，「まったく不安でない」「あまり不安でない」は２５％と低い数値に留まり，「やや不安である」「非常に不安である」は５５％と高い数値となっていた。学習に対する期待と不安が窺えた。

２）「保護者の対子ども不安」のまとめ

ア「自分勝手な行動をしない」「自分の感情を抑えることができる」「係や当番の仕事をきちんと行う事ができる」など，「まったく不安でない」「あまり不安でない」という数値が５５％～７１％と高い数値を示していた。また，「やや不安である」「非常に不安である」は，１３％～２４％と低い数値であった。不安というよりは，「子どもを信頼している」「子育ての自信が伺える」結果であった。

イ「中学校で学習を遅れることなく続けていくことができるか」や「勉強に進んで取り組む事ができるか」など，学習に関する項目では「やや不安である」「非常に不安である」が４５％，５５％という回答で不安を示す数値が高くなっていた。学習に対する期待と不安が窺えた。

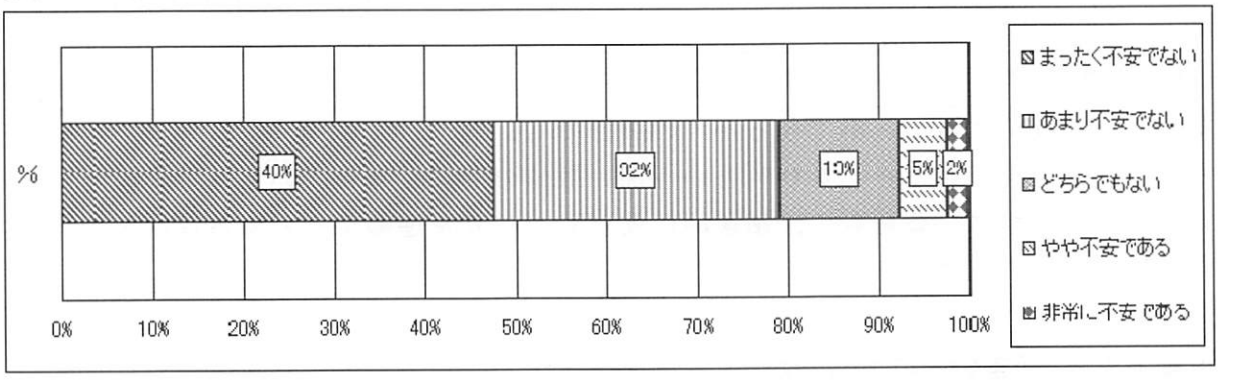
ウ「友だちからいじめられていないか」「集団から取り残されないか」「上級生とうまく付き合えるか」では，「やや不安である」「非常に不安である」がそれぞれ３９％，３３％の数値を示していた。

エ「部活動の練習」や「体調」の心配なども，「やや不安である」「非常に不安である」の回答が３０％以上を示していた。健康面に対する不安が３割を超えていた。

（３）「子ども自身の不安」

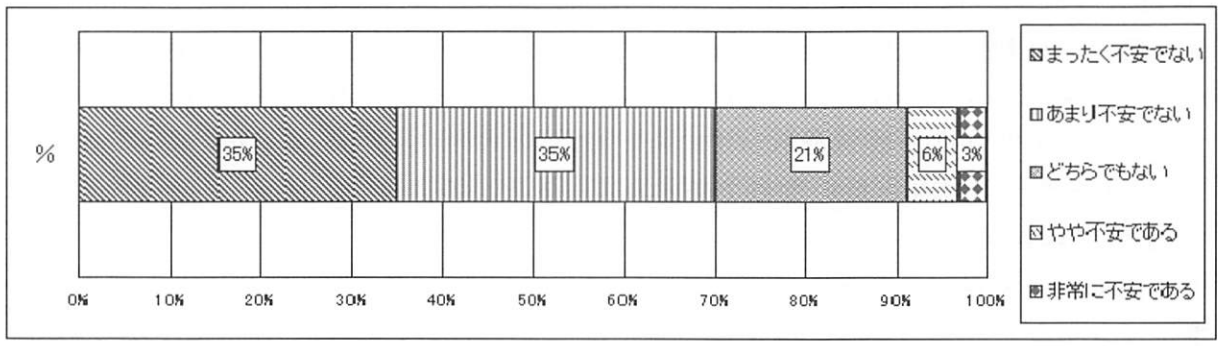
１）主な項目の特徴

①友だちをつくることができるか



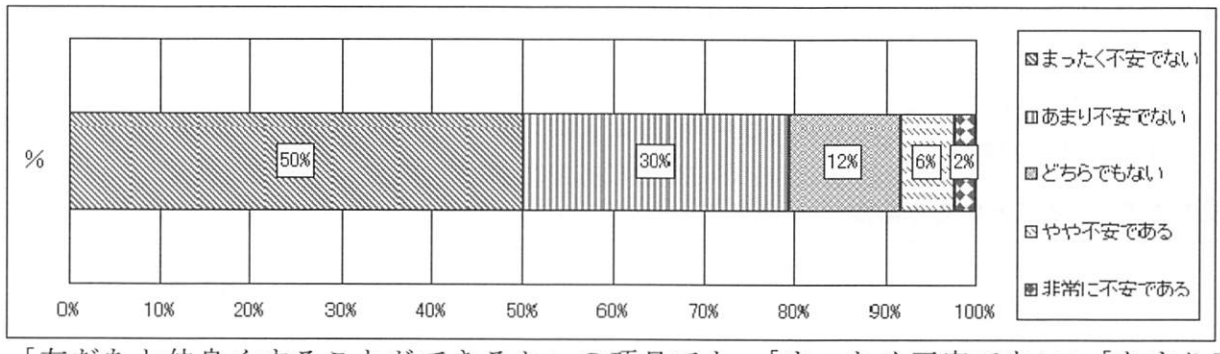
「友だちをつくることができるか」という項目では，「まったく不安でない」「あまり不安でない」で，実に８０％の子どもたちが「友だちをつくることができる」と回答をしていた。「やや不安である」「非常に不安である」は７％に過ぎなかった。友人関係に関する不安は低かった。

② 友だちや先生とのコミュニケーションをとることができるか



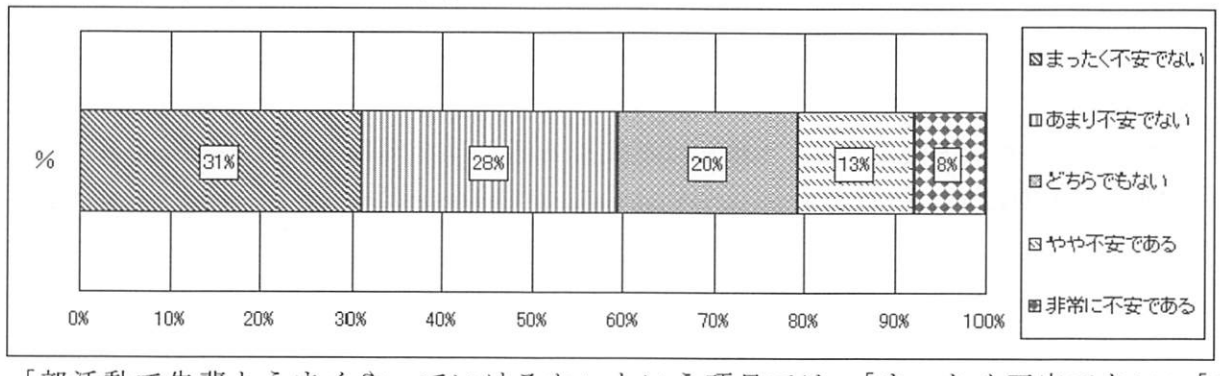
「友だちとコミュニケーションをとることができるか」に関しても，「まったく不安でない」「あまり不安でない」は，７０％と高い回答を示している。（１）と同様に，「やや不安である」「非常に不安である」が９％と少なく，不安より自信の伺える子どもたちが多いことが明らかになった。

④ 友だちと仲良くすることができるか



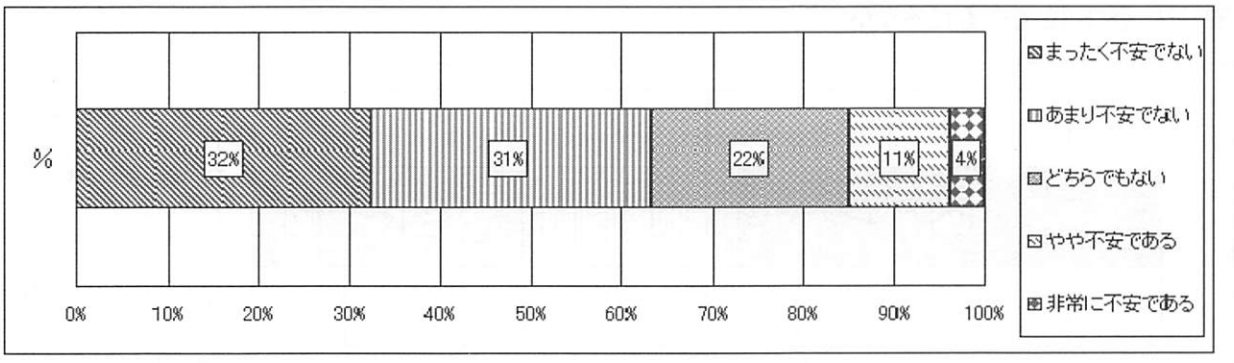
「友だちと仲良くすることができるか」の項目でも，「まったく不安でない」「あまり不安でない」を合わせると，８０％という高い数値の回答となっていた。中学校という新たな生活の場に，夢をもち，積極的に友だちづくりを進めようとする意欲がこの高い数値として表れていると考えられた。

⑥部活動で先輩とうまくやっていけるか



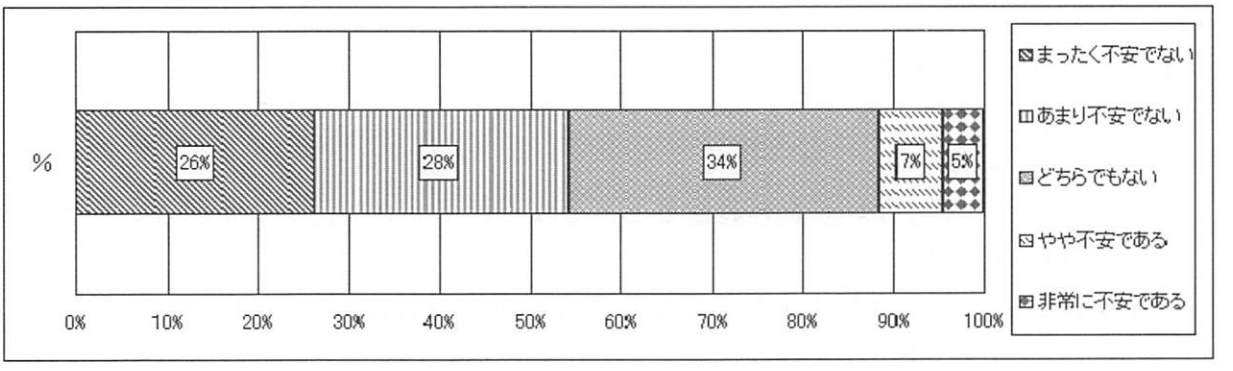
「部活動で先輩とうまくやっていけるか」という項目では，「まったく不安でない」「あまり不安でない」は，５９％である。（１）（２）（４）の項目と比べれば，数値は低くなっていた。「やや不安である」「非常に不安である」の数値も２１％を示し，部活や上級生に対する不安が出ていた。

⑦ 中学校での生活にすぐに慣れる事ができるか



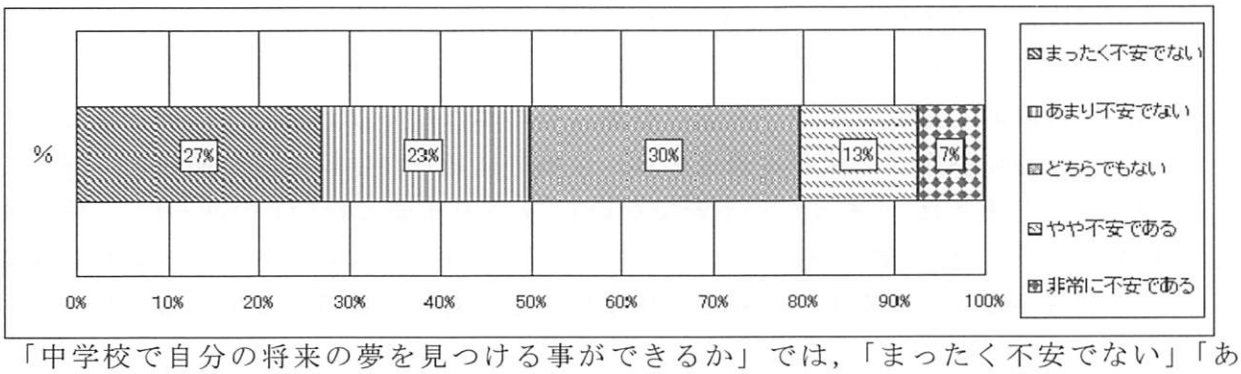
「中学校での生活にすぐに慣れることができるか」では，「まったく不安でない」「あまり不安でない」が６３％の数値を示していた。やはり，（１）（２）（４）の項目と比べれば，数値は低くなっていて，「やや不安である」「非常に不安である」の数値も１５％を示している。

⑭勉強の他に学校ではどんなことをするか



「勉強の他に学校ではどんなことをするか」という項目では，「まったく不安でない」「あまり不安でない」が５４％であった。友だちづくりや部活動などに比べて，具体的にイメージできない質問になってしまった。それでも，過半数を超える数値の回答があったことは，やはり，生徒たちにとって，新たな中学校生活に魅力があると感じていることが示唆された。

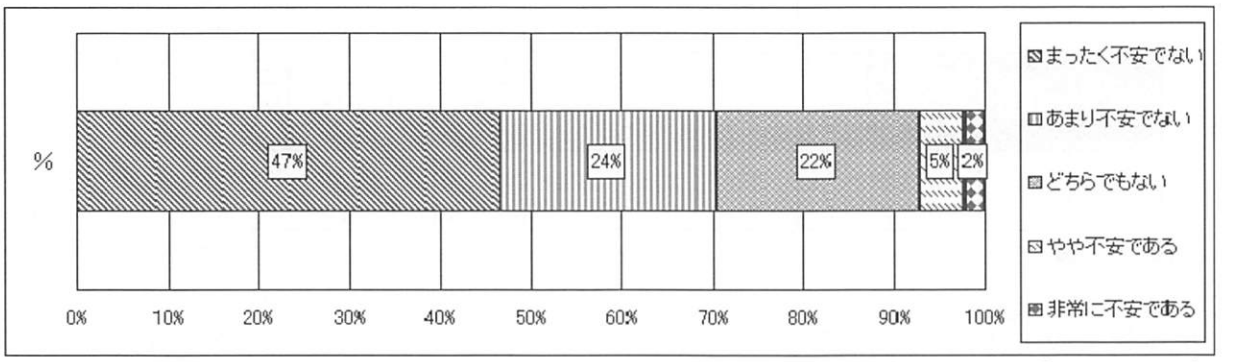
⑮中学校で自分の将来の夢を見つける事ができるか



「中学校で自分の将来の夢を見つける事ができるか」では，「まったく不安でない」「あまり不安でない」が５０％という数値の回答であった。進路に関する項目として設けたものであるが，まだ進路についてはっきりしていない現状もあり，「やや不安である」「非常に不安である」が２０％と「子ども自身の不安」についての調査では，高い数

値となっていた。

⑱安全に登下校できるだろうか



「安全に登校できるだろうか」という項目では，「まったく不安でない」「あまり不安でない」で，７１％という高い数値の回答であった。自転車による登下校の生徒がほとんどであるが，部活動などを考えると，保護者の送迎による支援なども考えられ，まだ，登下校に関する状況が現実的に捉えられていない面もあると考えられた。

２）「子ども自身の不安」のまとめ

ア　「友だちをつくることができるか」「友だちと仲良くすることができるか」「友だちや先生とコミュニケーションをとることができるか」の質問項目では，「まったく不安でない」「あまり不安でない」を合わせると，それぞれが８０％，８０％，７０％と非常に高い数値の回答となっていた。

イ　「中学校の生活にすぐ慣れる事ができるか」「部活動の練習についていく事ができるか」の質問項目でも，「まったく不安でない」「あまり不安でない」が合わせると，それぞれ６３％と６２％と高い数値を示していた。新しい生活や環境に前向きに取り組んでいることが窺えた。

ウ　表現を変えた項目では，「部活動と勉強の両立ができるか」では，異なる傾向を示し，「やや不安である」「非常に不安である」が３６％という数値を示していた。この両立には４割近い生徒に不安があることが示された。

エ　「進路は大丈夫だろうか」「中学校で自分の将来の夢を見つける事ができるか」など，進路指導に関する項目では，「やや不安である」「非常に不安である」の回答を合わせると，それぞれ３０％，２０％と割合が高くなっていた。今後，進路指導に関して，意図的，計画的な指導を進め，不安の解消に努めねばならないことが示唆された。

オ　「子ども自身の不安」に関する調査では，全体的に新たな学校生活を前向きに捉えていることが窺えた。「まったく不安でない」「あまり不安でない」の回答は，「保護者自身の不安」「保護者の対子ども不安」「子ども自身の不安」の中で，一番高い数値での回答が多く，不安よりも新しい中学校生活に対する期待や自信が窺われた。

5　総合考察

平成１９年２月に総務省「低年齢少年の生活と意識に関する調査」が実施された。子育てや教育の現状についての問いに対して，小学校４年生から中学校３年生の保護者を対象とした調査である。その中で,「家庭のしつけや教育が不十分である」と回答した保護者が５９．９％，そして,「地域社会で子どもが安全に生活できなくなっていること」と回答した保護者が５８．３％であった。

保護者は，核家族で，共働きの家庭が多く，限られた時間の中で，子育て，地域社会や隣近所との交際，そして学校でのＰＴＡ活動などを保護者自身だけで営んでいる家庭も多い。時には，なかなか悩みを解決する糸口が見つからない課題に直面することもあることが予想される。子育てに関する悩みでも，三世代同居であれば保護者の親世代からの支援が期待できる。また，昔からの地域であれば隣近所からの支援が得られる環境にあるといえる。しかし，新たに造成されてできた住宅地や開発による都市化，工業化が進んだ地域にあっては，保護者の悩みはなかなか解消されず，不安として日常的に存在し，あるいは徐々に不安が膨らんでいく素地があるとも考えられる。

また，特別支援教育に目を向ければ，ＡＤＨＤやアスペルガー症候群の子ども達とのかかわり方など，保護者が理解し，対応法を会得しなければならない情報は数多くあると考えねばならない。

その子の有り様や感情の表出の仕方など，正しい情報を得ることが保護者の不安を取り除く有力な方法であるといえる。

最近,「モンスター・ペアレンツ」ということばが，流行語のように使われ，テレビ番組や新聞記事にも取り上げられるようになっている。小野田（2008）は，著書「親は，モンスターじゃない」（学事出版）の中で,「無理難題要求の急増は，保護者自身が置かれている生活への不安や悩みから来ることが多い」と述べている。

今の保護者世代自身が，経済的な豊かさや個の人権尊重は獲得できたが，都市化や核家族化の中で出てきた人間関係の希薄化や規範意識，基本的生活習慣の未獲得など，その弊害も受けているといえるのではないだろうか。

今回,「保護者との密接な連携を図った学校経営の在り方―中学校就学時における生徒と保護者の不安との関係から―」の考察を行ってきたことで，生徒と保護者のもつ不安について明らかになった。調査項目自体から適切なものかどうかさらに研究をしていかなければならないが，生徒と保護者のもつ不安に関する傾向を把握することはできた。「１問題と目的」や「２(2)中学校就学時における生徒や保護者の不安」でも述べたが，この調査をはじめとして,「開かれた学校づくり」をさらに進めていきたい。

以下に，今回の研究のまとめと今後の課題を述べる。

（１）研究のまとめ

ア　保護者は，子育て，特に中学校就学時の思春期の子どもの子育てについて，不安を感じている回答が多く，保護者は思春期の子育てに自信がもてない状況にあることが把握できた。

イ　保護者は，子どもの学習や進路について関心が高く，学習の理解が進むかどうか不安を感じていることが明らかになった。

ウ　部活動への関心も高い。しかし，学習との両立についても不安をもっていることが明らかになった。

エ　友人関係やいじめについての関心が高いが，自分の子がいじめられないかという不安が窺えた。

オ　子どもの学習，進路，人間関係他の項目と比べて，その他の項目には関心が薄い面もあり，偏りが見られた。

カ　生徒と保護者の不安の違いについて，把握することができた。

キ「親が…」とか「教師が…」ではなく，「子どものために…」という視点を共通理解することが重要であることが確認できた。

ク　中学校就学時の生徒のもつ興味・関心，そして保護者のもつ興味・関心の傾向をつかむことができた。

ケ　保護者と相対するのではなく，「子どもの健全な成長のために」同じ方向を向いて歩むことが重要であることが確認できた。

（2）今後の課題

ア　「開かれた学校づくり」について校長を中心に学校経営の一貫として積極的に推進していくことが求められている。

○　どのように「開かれた学校づくり」を進めるか。

○　地域・保護者との双方向の意見交換をどのように進めるか。

イ　教育相談の考え方を取り入れた生徒理解や保護者理解を一層進める必要性がある。

○　日常の中で発生する生徒間のトラブルへの対応の見直し

○　生徒や保護者との不安や悩みについての見直し

○　積極的な生徒指導の位置付けの工夫と実践

ウ　チーム援助の考え方を広め，学校内だけの狭い対応から福祉部局（市町村）との連携を図り，地域の中の学校としてのネットワークづくりを進める。

○　子ども課，保健センター，民生委員，学校など地域に密着した関係機関や人材の力の結集を図る。（例：「要保護児童対策地域協議会」（平成18年児童福祉法の改正時に設立）などとの積極的な連携，ケース会議の定期的な開催など）

引用文献

・ 國分康孝　1990　カウンセリング辞典　誠信書房

・ 文部科学省　1998　今後の地方教育行政の在り方（最終答申）中央教育審議会答申

・ 文部科学省　2008　生徒指導上の諸問題の現状と文部科学省の施策について

・ 小島弘道　2002　21世紀の学校経営をデザインする<上・下>　教育開発研究所

・ 小野田正利　2008　「親はモンスターじゃない」　学事出版

・ 田代信雄　1999　「森田療法入門」創元社

・ 山口豊一・高柳智恵　2006　「就学時における子どもと保護者の不安に関する研究」教育カウンセリング研究　NO２